

文学談

日本語新聞にある人が小説（当然日本人が書いたものである）を批評して、これは無産階級の文学者の作品であるが、彼の婦女観・恋愛観を見るにまだ全く旧式の頹廢思想である、だから疑問を免れないと言う。この言葉はとても面白いと思う。無産階級運動の中で、労働者と婦人の運命は同じく大きな変化を起こそうとしている。その利益は決して貧苦を訴える一握りの読書人（男）が志を得ることに限られない。これはたぶん誰でも認めることだろう。もし自分が意を得ないためだけで、鬱憤をぶちまけようとして、無産階級を自称し、思想的には寸毫の改変もなく、やっぱり‘夫は妻の綱’を信奉し、相変わらず女人を私有の道具とするならば、実際には道学者となんの違いもなく、結局はただの旧式文人の変相に過ぎない。文学の中には階級などあるはずもないが、表現されたものはある階級あるいは時代の精神に属することは可能であり、文章形式も内容によって若干の差異はあり得ると思う。いま上下に瀰漫しているのは、確かに資産階級の思想であり、私産制度を根基とする道德と風俗である。例えば女性の貞操の偏重や、妾婢を蓄えること、娼婦の公認および謳歌は、いずれもその明証である。同時にまた極めて少数の人が立ち上がって反対し、文芸においてもこうした“反有産階級の思想”の痕跡が見て取れる。——わたしはそれを無産階級の思想とは言わない。なぜならこれは階級の問題ではなく、多少とも実際の社会運動と前後して起こるけれども、こうした人々は必ずしも階級意識を主動とはせず、実はただその思想態度が因襲的な資産階級の思想と相反しているだけだからである。だから反抗的挙動に出るのである。中国では、有産と無産という二つの階級は厳然として存在する。しかし、言うも奇怪なことに、これはただ経済状況の違いだけであって、その思想は統一されていて、つまりともに同一の資産階級の思想を抱いているのである。無産階級にして資産階級の思想を抱くとは！？そうだ、わたしはこれが実情だと信ずる。貧乏人の理想はつまり富貴であり、彼の人生観は土豪劣紳と一致している。その間の関係はただ目前の地位に過ぎず、微賤な時の漢の高祖や楚の霸王が秦の始皇に対するようなものである。中国の資産階級は多くの婢妾を蓄え、表面上は、不孝に三あり後なきを大なりと為すなどといった聖賢の言葉で修飾するが、無産階級の婦女観はおおむね相去ること遠からず、あるいはもう少し本当のところをあからさまに言うに過ぎない。現在もし階級本位で文学を論ずるならば、無産階級文学は実は有産となんの違いもあり得ない、ただ語句や口調にやや違いがあるに過ぎず、たぶん白話の『書経』のようなもので、相変わらず嘘八百であろう。ちょうど亭長出身の劉邦は秦王の欠を補ったが社会革命とは言えないようなもので、古臭い思想を民衆の口から（あるいは民衆という神聖な名によって）もう一度言わせただけでは、文学革命と言うことはとてもできないのである。有産者は必ずしも反資産階級の思想的潮流に賛成できるとは限らないが、無産の知識階級は少なくとも資産階級の思想的泥沼から離れて、奮起一番すべきだとわたしは思う。日本の自称無産階級の文学者は、ほとんど貧賤をもって人に驕る旧式の名士とたがわず、伝統の力の強大さには甚だしいものがある。我が中国もこれをもって鏡とすべきである。民国十六年六月二十日。

※初出：1927年7月2日『語絲』第138期